

【書き下し及び注】

浄土十勝箋節論卷上

卷第六章目

散心往生勝

初紙

墳籍仏説勝

四紙

他家推称勝

五紙

兼学褒讚勝

十紙

积文隆魔勝

十三紙

廃立獨妙勝

二十三紙

三学自然勝

二十六紙

持念超経勝

二十九紙

攘災招福勝

三十五紙

説時説處勝

三十八紙

浄土十勝箋節論卷上

坤下

菩薩大乘戒比丘澄円撰

散心往生勝 第三十

夫れ十息散乱すれば九乳の鼻鐘響きを発せず、一心成ぜざれば百鍊の鸞鏡影を浮かべず。且く『金剛頂經』に云く、⁽¹⁾

我れ及び一切の衆生、生死を離れて大涅槃処に至ることを得。諸の聖者の相好具足して如来位に居るが如きは、いかんが当に願を得べき。阿闍梨、哀愍して示誨せよ。其の阿闍梨、此の弟子勝法を与うるに堪えたることを知らば、当に告げて言うべし。汝が請する所の如きは、我れ今仏の教えたまう所に依りて、能く汝に授与すべし。当に一心に諦聴して心に散乱することなかるべし。若し散乱せば、一切如来及び金剛薩埵加持したまわざる所なり。^{上^三}

又た、『毘盧遮那經の疏』第十一に曰く、⁽²⁾

常樂坐禪、樂作成就とは、真言門の中に於て心一境に住して散乱せざるなり。字を觀じ、声と本尊と種子とを觀ずるが如きは、隨いて一事に於て心外縁せざれば即ち能く大成就を得。若し心散乱有れば、設い無量劫中を経て成就を欲求すれ

(1) 『金剛頂經』(正藏一八・二四九上)。

(2) 一行『毘盧遮那經疏』(正藏三九・六九三中)。

ども尚し不可得なり。何に況んや一生に法利を得んや。上巳

同第十に曰く、⁽³⁾

心をして此の境に住せしめ、一縁にして不乱なれば字字相応し句句亦た相応す。此の一一の字は明白淨徹なること淨明珠の如し。一一の字皆な又た明了にして遍く光鬢有りて次第に断ぜず、而も、其の心を注ぐこと甘露の灌灑するが如し。是の如く一縁なる時はたとい種種の障り起ること有りて或いは大可畏の像ちを作す。諸の散心の人は、見る者狂乱し、或いは大声を作す。たとい山王なりとも、亦た破碎しつべし。是の如きの事有りとも、行者、真の踴健の菩提の心に住して一縁不動にして取捨有ること無し。故に一見に住すと名づく。若し是の如くせざる者は経年を経て千万落又を誦満すと雖も猶お成就することを得ず。何況んや一落又をや。上巳

同第七に曰く、⁽⁴⁾

若し但だ口に真言を誦して其の義を思惟せざれば、只だ世間の義利を成すべし。豈に金剛体性を成ずることを得んや。故

(3) 一行『毘盧遮那経疏』(正藏三九六八八中)。

(4) 一行『毘盧遮那経疏』(正藏三九六五七下)。

に偈に云く。最勝の真実声は真言と真言の相と行者諦かに思
惟せば不壞句を成ずることを得^上と。

^{そらとも}抑瑜伽の行人、自ら傷歎して言く、⁽⁵⁾

我等 ^{ちやくちやく}適、人界の生を受けて六根具足の身分を保つことを
得。剩え仏法の縁に逢いて三密瑜伽の教旨を聴聞すること、
針芥相い投るがごとく亀木の自ら遇うに似たり。しかるに無
始の業障未だ除^{のぞ}られず、真実の信解立し難し。茲に因りて口
に三三平等の文を唱うと雖も深く自他の簡別を存し、耳に空
空無著の詞を聞くと雖も、実有の慮想のみに纏^{まつ}はれる。
^{ちやくちやく}適 道場を排^{おし}けて善業を修せんと欲すれば或時は昏す。昏
すれば睡眠に入る。或時は散す。散すれば塵境を縁す。昏散
の二病若し除かずんば想観の一縁、何ぞ成ずることを得ん。
之れに依りて倉中の珍衣は寒を防ぐに由無く、箱底の妙薬は
毒を去ること得ること難^云し^云と。

爰に吾が宗の散称は然らず。是れ則ち下至十声の本誓の剋果す
る所なれば三学式内の通談の及ばざる所なり。曰く敢て問う。曰

く。二宗各々其の一を談じて異すること無し。『般舟讚』に曰く、⁽⁶⁾

定善の一門は韋提請す。散善の一行は釈迦開したまう。定散俱に廻すれば宝国に入る。即ち是れ如来の異の方便なり^上と。

夫れ散称往生の高判は^{ただただ}啻一家不共の別談のみにあらず。又た、

天台大師三箇処の秘釈に出でたり。知らんと欲せば来問せよ。又た、大智律徳の云く、⁽⁷⁾

復た理事行殊に定散機異なりと雖も、皆浄業を成じて尽く往生することを得。然らざれば則ち無記の妄縁、定んで虚福を成すのみ。^{至乃}称名は易きが故に相続すれば即ち生ず^上と。

又た智覚禪師の『神棲安養の賦』に云く、⁽⁸⁾

散心を運んで化生す。上、一生の帰命に至り、下、十念の廻向に至るまで、並に往生を得ること經文具に載す。並に是れ散心の修善なり。法華經に、若し、人、散乱の心にして塔廟の中に入り、一たび南無仏と称せば、皆已に仏道を成ずと云うが如し^{云と}。

又た、楞嚴の先徳の云く、⁽⁹⁾

(6) 善導『般舟讚』（浄全四・五四六上）。

(7) 元照『阿弥陀経義疏』（浄全五・六八三上）。

(8) 一部、延寿『楽邦文類』（正蔵四七・二二四下）に引く。

問う。理觀を修せずして只だ一仏の名号を称するの人、往生を得んや不や。如何。答う。亦た、往生することを得べきなり。彼の繁念定生の願にも、未だ理觀を修せよと云わず。聖衆來迎の誓いは只だ是れ至心の称名なり。夫れ、名号の功德は莫大なるを以ての故なり。所以に空仮中の三諦、法報応の三身、仏法僧の三宝、三徳、三般若、此の如き等の一切の法門悉く阿弥陀に三字に摂す。故に其の名号を唱うれば、即ち八万法蔵を誦し、三世の仏身を持つなり。纒かに弥陀仏を称念するに、冥に此の諸の功德を備うることを、猶し丸香の一分を焼くに衆香悉く熏じ、大海の一滄に浴すれば衆河の水を用ゆるが如くなるのみ。故に慈恩の曰く、諸仏の願行は此の果名を成ず。但だ能く号を念ずるに具に衆徳を包ぬ。故に大善と成りて往生を廢せず云云と。是れを以って散心に念仏して極樂に往生すること、昔より今に至るまで其の数幾ばくぞや何ん。其の中に梁朝に一僧あり。名を雄俊と曰う。乃至広く彼の縁を引けり散心の念仏、誠に深妙なるをや。智解胸に満つるの人すら猶

お理観に堪えず。況んや尼女在俗は只だ俊先の蹤を追うべし。彼の浴すること必ずしも江海にあらず、之れ垢を去けんことを要す。馬は必ずしも騏驎にあらず、之れ善く走らんことを要すと云うが如し。念仏必ずしも理観にあらず、之れ往生せんことを要す。散乱の中の念仏なりと雖も、只だ誠心を用ゆれば必ず遂に引接を蒙る^{上巳}と。

又た、道生法師の辞世の頌に曰く、⁽¹⁰⁾「西方の聖衆、現に來りて神を迎う。散心の念仏、功妙なること測り難し」^{上巳}と。夫れ諸教の散心は唯だ来縁を結び、念仏の散乱は正しく直脱を成ず。学者自ら商量せよ。原れば夫れ、超世別願殊勝の尊号は、恒沙の万徳を含み、森羅の諸法を納む。至れるかな。極れるかな。限り無く私無し。譬えば太虚の衆色を含し、渤澥の群流を納むるが如し。所以に設い散心の持誦と雖も、三有の流れに逆らいて七宝の台に坐す。其の散功の絶妙なること、宛も梅檀樹を破るに厥の^そ段猶お是れ珍宝なるが如く、又た葉王樹を削るに其の^{ほら}柿亦た即ち靈葉なる

(10) 戒珠(假託)『往生淨土伝』卷上(真福寺善本叢刊『伝記験記集』第二期第六卷、四六〇〜四六一)。

に似たり。大に夫の聖道の修者の十氣調わざれば、二悉成ぜざること珠玉碎きて珍たからに非ず。錦繡裂けて服にあらずと云うには異なり。学者商量せよ。請い問う。曰く。散心称名の功妙難測にして、声念する毎に即往正業を成ずること、譬えば大地を射るに箭箭悉く地面に中り、生命を受くるもの念念に皆死路に近づくが如し。更に違失無し。修者、信行して累外に独歩せよ。婆沙論一百八に云く、「(11) 応に此の無常想を修し、永く諸漏を尽くして般涅槃すべし」(12)と。夫れ散心称名の行人、縦い業王の所繁を被ると雖も、三字尊号の大智を有するが故に、善能く業王の忸械の難苦を解脱す。余行の人は是れに反す。智者省察せよ。南無阿弥陀仏。

墳籍仏説勝 第三十一

夫れ慧文は『中論』を得て以て自ら四教三觀の義を立て、天台は『妙経』を釈して以て独り自解仏乘の旨を宣ぶ。之れを以て之れを觀れば、円宗の縑細けんじょうは人説と謂つべし。吾が家の章疏は然らず。高祖大師自ら靈相を挙出して云く、(12)

(11) 玄奘訳『阿毘達磨大毘婆沙論』（正蔵二七・五五八中）。

(12) 善導『観経疏』（浄全二・七二下）。

於すなわ即ち義門を条録す。此れより已後、毎夜夢中、常に一僧有り。来たりて玄義科文を指授す上上と。

祖師上人、之れを受けて云く、⁽¹³⁾

就なかんず中く、毎夜夢中に僧有りて玄義を指授す。僧は恐らくは是れ弥陀の応現ならん。爾らば謂いつべし。此の疏は是れ弥陀の伝説なりと。何に況んや。大唐相い伝えて云く、善導は是れ弥陀の化身なりと。爾らば謂いつべし。又た、此の文は是れ弥陀の直説なりと。既に写さんと欲せん者、一もつばら経法の如くせよと云う。此の言、之れ誠なるか。仰ぎて本地を討ぬれば四十八願の法王なり。十劫正覚の唱え、念仏に憑み有り。俯して垂迹を訪えば専修念仏の導師なり。三昧正受ことばの語、往生に疑い無し。本迹異なりと雖も化導は其れ一なりと。云云

学者知んぬべし。儒士言えること有り。做えば長ぶべからず。欲は縦ほしままにすべからず。志は満つべからず。樂は極むべからず。樂は極むべからずとは、樂を極むれば哀を生ず。欲は縦にすべからずとは、欲を縦にすれば災いを成ずと。忽ちに無常若し来逼せば、

精神錯乱して始めて驚忙す。万事の家生、皆な捨離し専心に発願して西方に向かえ。南無阿弥佗仏。

他家推称勝 第三十二

夫れ南三北七は教法の浅深を論じて以て自宗を高ぶり、且つ玉泉玉華は一三の権実を諍いて以て他宗を沮む。爰ここに吾が別意弘願の宗教は、是れ即ち釈尊出世の本懐、弥陀済凡の秘術なるを以ての故に諸家の棟梁一同に之れを推称し、他門の關鍵満遍に之れを歎勸す。静かに以れば、千峯の華山に朝するは其の高岳なるを以てなり。万派の滄溟そうめいに肅するは、其の深広なるを以てなり。凡そ物の高深の徳有る者は称誉しての来たれる所以か。夫れ一天の英髦は悉く手を拍うちて吾が堂上に群し、四説の賢哲は皆な舌を鳴らして我が門前に市す。毛嬙もうしょうせいし西施は善く毀る者も其の好きかおよを蔽すこと能わずとは、蓋し此の謂いなるものか。且く、天台大師は円宗の高祖、等妙の大聖なり。其の『観経の疏』に曰く、「二蔵(14)に義を明かさば菩薩蔵に収め、漸頓悟入には此れ即ち頓教なり」上巳

(14) 智顛『観経義疏』(浄全五・二〇四下)。

と。又た、淨影大師の『觀經の疏』に云く、「此の經は是れ菩薩藏に収め、又た頓教の法輪なり」⁽¹⁵⁾と。又た、慈恩大師の『弥陀經通讀』に曰く、「此の經は、一心不乱にして十念專精なれば便ち淨土に往く。頓に濁世を抛つは即ち頓教の所収なり」⁽¹⁶⁾と。夫れ淨影は地摂二宗の高祖、慈恩は応理円成の祖師なり。然るに彼の二哲、善く昆弟と為りて志を一にし、力を戮せて淨教を褒讚すること叮嚀懇懃なり。知るべし。弘願の別典、聖道の通教に勝れたることを。加之ず、智者の『十疑』の自力他力の対判、基公の『要決』の三乘淨土の比較、尤も他家推称の成証に備うべし。

亦た、嘉祥大師は空門三論の宗匠、歴劫侍仏の名徳なり。其の『觀經の義疏』に曰く、⁽¹⁷⁾

問う。念仏三昧は何の因あってか、此の如きの多罪を滅することを得るや。解して云く、仏に無量の功德あり。仏の無量の功德を念ずるが故に無量の罪を滅することを得上と。

靈芝の『義疏』に曰く、⁽¹⁸⁾

須く信ずべし。他力を憑むに非ざれば業惑を截るに以て期無

(15) 慧遠『觀經義疏』（淨全五・一七〇上）。

(16) 基『阿弥陀經通贊疏』（正藏三七・三三二上）。

(17) 吉藏『觀經義疏』（淨全五・三四五上）。

(18) 元照『阿弥陀經義疏』（正藏三七・三五六中）。

く、此の門に遇わずば生死を脱するに路無けん。聞持、頗る衆して正しく時縁に撰えり⁽¹⁹⁾と。

同師の『観經の疏』に委しく頓教法輪の相を判ぜり。知らんと欲せば之いて見よ。又た、智覚禪師の『万善同歸集』に曰く、⁽¹⁹⁾

当に知るべし。自行は円^{まどか}にすること難く、他力は就^なり易し。

劣士の輪王の勢に附きて四天に飛遊し、凡質の仙薬の功を仮りて三島に昇騰するが如し。実に易行の道と為りて、疾く相應することを得と。慈旨叮嚀なり。須く肌骨に銘ずべし⁽²⁰⁾と。

又た云く、⁽²⁰⁾「隻翼沖し難く、孤輪運にあらざ⁽²¹⁾」⁽²¹⁾と。又た、同禪師の頌に曰く、

禪有りて浄土無きは、十人に九は蹉路す。陰境若し現前せば、警^{にわか}爾として他に随いて去りなん。禪無くして浄土有れば万修は万人ながら去る。但だ弥陀を見たてまつることを得ば、何ぞ開悟せざることを愁えん。禪無く浄土無きは鉄床に并^たらに銅柱と、万劫と千生、箇人の依護没し、禪有り浄土有るは猶し角を載ける虎の如し。現世には人師と為り、来生には仏租

(19) 延寿『万善同歸集』（正藏四八・九六八中）。

(20) 延寿『万善同歸集』（正藏四八・九七〇中）。

(21) 出典未詳。大祐『浄土指歸集』（正統藏六一・三七九中）など、後代の文献に引用あり。

と作る^上已と。

夫れ寿公大禪師は孰れの宗の人ぞや。是れ豈に宗門の標準にして内外同じく達し、禪家の白眉として宗説俱に通ぜる大禪徳に非ずや。然るに『帰集』の文、分明に一頌の言炳^{へいえん}焉たり。爰^こに知んぬ。仏心宗の学者有りて、浄土門の教法を歎ずということを。

抑^{そもそも}も小子、別意弘願の宗旨に就きて他家推称の一門を成立せしの時、或る禪伯難じて曰く、他家推称の義は唯だ局りて吾が禅門のみに在り。謂所る須弥金翅の相對有りて以て禅教の高卑を詳勘し、叻爽白日の批判を致して以て宗乗の差異を顕す等、是れ則ち吾が門の他家推称の義なり。然るに今、浄土門の他家推称の義を聞けば、諸家の賢哲有りて他力の教法を褒讚すと雖も未だ要らずしも自他比対の評量有らず。若し爾らば、論師の所立、更に成^し立せざる者なり^{云と}。峩^{しき}に小子答えて曰く、此の難、非なり。夫れ玉泉寺の『十疑』の中に自他二力を立てて自力を貶^{げな}して他力を歎し、玉華宮の『要決』の文に三乗浄土を挙げて三乗を捨てて浄土を取る。又た永明寺の『帰集』の文に、自行は円にし難く他力

は就り易しの高判有り。是れ尤も自力の心印を毀りて他力の往生を讃ずるの意なり。凡そ他家の英雄等、浄教を歎ずる毎に皆な悉く相對の比判ありて、全く独歎特稱の義無き者なり。若し爾らば、大和尚の難破、甚だ当たらずと為す云と。

皆に彼の大禪師、頷許して服膺す。抑西施が堂上には招かざれども、華夷の男、争い逐したがい、葛華の門には前には召ははざれども瘦瘠の人投歸す。聖王言わざれども万国競うて王に歸し、巨壑思わざれども千流各朝宗す。富士呼ばざれども乏人集まる。智者之れを黙すれども童蒙聚る。明鑑瑩きて、淨き則は妍蚩うの像も之れに現じ、清水澄みて湛なる則は大小の相之れに影る。蒼天心無けれども万有之れに容る。黄地念い無けれども百草之れより出づ。之れを以て之れを觀ずれば、千傑の真宗を讃えるは、靈徳の高妙なるを以ての故なり。

問うて曰く、天台を依憑とするの師、十家あり。禪門を推稱するの人、六輩あり。若し爾らば、他家推稱の一門、未だ必ずしも浄土一宗の秀句にもあらず。如何ん。

答えて曰く、彼の天台の十師は、只だ是れ許諾の依憑のみにして、未だ三止三觀の妙行を修せず。禪門の六家は、亦た即ち碑銘の伝録にして教外別伝の心印を提せず。吾が浄土は之れを大いに懸隔せり。所謂る諸家の英雄、快く之れに歸嚮して解脱の捷徑を憑み、他門の高識、遅く之れを推稱して出離の要路と定む。讚じて取らざると歎じて依行すると優劣判然たり。学者心を雷めよ。

曰く敢えて問う。曰く、百家歸嚮して皆な西刹に詣で、他門の推稱して悉く安養に往くこと、此の義、僧史諸伝の文、炳焉なり。誰か之れを諍うべけんや。但だし浄影等の一両に於ては少在属無にして、以て難と為るに足らず。彼の六輩十家の全てに依行せざると江淮諸英の信樂勤修すると其の義、不同なり。敢えて混淆すること莫し。又た啻だ漢朝の諸家、浄教を毘讚するのみに匪ず。日域の諸宗、皆な悉く浄土を指歸して往生を欣求す。所謂る聖徳太子、行基菩薩、豎真和尚、伝教大師、慈覚大師、智証大師、護命僧正、慈慧大師、安慧和尚、慧亮和尚、相応和尚、伝灯大法師、善議静観僧正、奘演僧正、空也上人、浄蔵貴所、源信僧都、覺運

僧正、遍照僧正、覚超僧都、増賀上人、寛印供奉、長和法親王、元杲僧都、永観律師、覚鏤上人、勝覚僧正、道範闍梨、珍海已講、静遍僧都等是れなり。此等の大師先徳、皆な遮那大教の領袖、止観上乘の眼目、二蔵八不の達士、八識三性の英髦なり。然るに啻だ著述有りて浄土を褒讃するのみに匪ず。正しく西方に往生して仏道を増進する者なり。其の末塵、誰か之れに遵わざらん者か。原ぬるに夫れ、西方の教行は法滅百歳の時に至るまで利物衰滅せざることは、諸師称誉の来たれる所以か。

問うて曰く、大本の下に説かく、⁽²²⁾「我れ慈悲哀愍を以て特り此の經を留めて止住すること百歳ならん」と。之れを以て之れを観ずれば、退代の利物は唯だ是れ釈尊の大慈大悲より起きて、全く他家推称の故には非ざる者か。

答えて曰く、四依の諸家、皆な浄土を推称することは、是れ偏えに牟尼大我の教令を奉るに由りて然なり。『經』に曰く、⁽²³⁾「則ち如来の使なり。如来に遣わされて、如来の事を行ず」已上と。亦た天台の韶国師、漢の乾祐中に康師の墳塔を新たにす。是れ亦た

(22) 『無量寿經』(浄全一・三六)。

(23) 『法華經』(正蔵九・三〇下)。

他門の高僧の浄土の祖師を崇重するの義のみ。古えに曰く、「百足の虫、死に至るまで僵れざることは之れを扶くる者衆ければなり」⁽²⁴⁾。此れは我が浄教の多衆の推称に依りて法滅百蔵の時に至るまで、利益、更に殄滅せざることを謂うか。於宜べなるかな。夫れ群聖の称讚するところ、諸徳の帰崇する所、唯だ吾が門のみ已に在りて、余に非ず。爰ここに諸宗の末塵有りて、遠くは本師牟尼の遺教に違ひし、近くは自門高祖の嚴訓を背きて、多く浄教を廢して、恣に麁行と匄る。師資違反の過、其れ如之何。若し人有りて、浄教に於て須臾も毀謗を加え、刹那も訕誹を加え、現世には其の命を終えることを得べからず。当来には姜里を出づることを得べからず。学者、慎みて浄教を毀訕すること莫かれ。

『法華』に云く、⁽²⁵⁾

深く世樂に著して慧心有ること無し。三界は安き無きこと、猶おし火宅の如し。衆苦充滿して甚だ怖畏すべし。常に生老病死の憂患有りて、是の如き等の火、熾然として息まらず^{上巳}と。

夫れ吾が弥陀覺王因位の時、六八の願門を立てて三祇の起行を励

(24) 出典未詳。

(25) 『法華經』（正蔵九・四下）。

ます。其の体たるや、木叉の舟舫を浮かべて、而済乎愛海の群類を済われたし。般若の慧灯を挑みて迷倒の凡愚を導く。実に是れ善巧殊特にして、方便奇夷なり。此等の大善を以て三字の尊号に摂め、普く一切衆生に施す。南無阿弥陀仏。

兼学褒讃勝 第三十三

夫れ百川の巨海に歸するは水中の長なればなり。鱗介の亀竜に宗するは甲鱗の王なればなり。原ぬるに夫れ立宗の法は他宗の上に居らんことを望み已必す。讚教の風は自ら定んで余家の下に立たんことを辞す。設い諸宗を兼学すること有りと雖も、猶お本宗を以て、以て根本と為す。兼宗を以て、以て枝末と為す。所以に清涼国師の禪門を兼ねんや。心印を以て頓教に属し、一行禪師の妙経を褒めんや。円談を以て顯宗に属す。且つ亦た三論宗の嘉祥大師、法相宗の智周大師等、五重玄義を依憑して『戒経』『仁王』を釈すと雖も、未だ円宗、二藏教に勝れりと言わず。亦た台教、三時教に超えたりとも立てず。又た華嚴宗の慧苑、通玄、天台の

四教に影響すれども、未だ自家の五教に超ゆと判ぜず。大仏頂宗の惟懿、『摩訶止観』を依用すれども我門の仏頂に勝れりとも定めず。此の例、一に非ず。羅縷に違あらず。然るに吾が宗は然らず。他家、称誉する毎に皆な諸れを自宗の上に置きて、以て昆讃を致す。

且らく禅門の清了禅師の云く、⁽²⁶⁾

死心の新和尚、天衣の懷禅師、長蘆の頤禅師、円照の本禅師、南岳の慧思禅師、法照禅師、浄慈の大通本禅師、天台の懷玉禅師、梁の道珍禅師、毗陵の法真禅師、唐の道綽禅師、浄慈の靄禅師、皆な宗門の大匠として已に不空、不有の法を悟れども、志を乗せて浄業に孜孜たることは浄業の見仏の宗門よりも簡易なるに非ざることを得んや^上と。

亦た法相の慈恩大師の云く、⁽²⁷⁾

夫れれば、生まれて像季に居り、聖を去ること斯れ遙かなり。道、三乗に預かれども契悟するに方^{のり}無し。人天の兩位は躁動として安からず。智博く、情^{しろう}弘きは、能く久しく処する

(26) 出典未詳。天如惟則『浄土或問』（正蔵四七・二九三下）に類似文あり。

(27) 基『西方要決』（正蔵四七・二一〇上）。

に堪えたり。若し也た識痴かに行浅きは、恐らくは幽塗に溺れん。必ず須らく、娑婆に遠跡を神を淨域に栖わしむべし

上巳。

又た云く、「末法万年に余経悉く滅するとも、弥陀の一教は物を利すること偏増ならん」上巳と。

抑「淨業見仏簡易宗門」の言、且つ「道預三乘無方契悟之談」、且つ学著自ら商量せよ。又た天台大師、童女が証入を判じて真因に属し、韋提の得忍を釈しては初住と定めたもう。然るに『法華』⁽²⁸⁾には「智慧利根得陀羅尼」と曰い、且つ『觀經』⁽²⁹⁾には「心想羸劣未得天眼」と曰う。

小師、今二經の現文に依りて夫人、童女の利鈍の差降を詳勘せば、天、懸かなる者なり。若し爾らば、天台の高判の意、豈に『觀經』の下に『法華』を置き、一乗の上に六字を居えたるに非ずや。夫れ和漢の先蹤を尋ねて判教の旧例を案ずるに、諸宗兼学の英髦も且らく一宗を挙揚するの時は褒貶の言を出だして、各毀讚の文を著わす。所謂る五大院の和尚の云く、⁽³¹⁾

(28) 基『西方要決』（正蔵四七・二〇九中）。

(29) 『法華經』（正蔵九・三五中）趣意。

(30) 『觀無量壽經』（淨全一・三二九）。

(31) 『菩提心論見聞』（正蔵七〇・三七下）。

若し与えて之れを論ぜば、円教の初心、真言の凡夫、同じく如来秘密の境界は、真俗円融、万法一如なりと知り、同じく五十二位を経て、同じく即身成仏を得。若し奪うて之れを論ぜば、円人の初心は但だ理観を知りて、事密を知らず。乃至、初住には但だ理仏を証して曼荼羅に非ず。妙覚を説くと雖も、行法を説かず。故に「惟真言法中即身成仏故是説三摩地法於諸教中闕而不書」と云う⁽³²⁾と。

又た山王院の大師の云く、「童女は三密の方便を知るが故に速疾に成仏し、身子は三密の方便を知らざれば久長に成仏す」⁽³³⁾と。又た慈覚大師の『教王経疏』に曰く、⁽³⁴⁾

或る大乘経には見証を明かすと雖も、但だ理にして事無し。
或る大乘経には粗^ほ真言印契を明かすと雖も、支分具さならず、仏意を尽くさず⁽³⁵⁾と。

又た曰く、⁽³⁴⁾「三密の結要は余経に説かず。五智の奥玄は此の『経』に独述す。『法華』の奥旨、尚お及ばず。何に況んや自余の教えをや」⁽³⁵⁾と。

(32) 円珍『法華論記』か、出典未詳。

(33) 円仁『金剛頂大教王経疏』（正蔵六一・九下）。

(34) 円仁『金剛頂大教王経疏』（正蔵六一・七下）。

此等らの大師、先徳は皆な遮那止観を以て鳥の双翼と為し、法華、真言を以て車の両輪と為したまえり。然りと雖も、真言を褒讃するの日は顕宗を以て密乗の下に置ける者なり。吾が浄土門は然らず。夫れ二道兼稟の英雄と為して、九品浄土の玄旨を激揚するの時は、難行易行を対判して、難行を貶めて、易行を褒め、自力他力を比較して、自力を捨て他力に帰す。其の例、一に非ざれば、縷説するに違あらず。抑昔より未だ曾て見ざる所なり。諸師解釈の中に聖道の宗旨を宣揚するの日、持名の妙行を嗤うて権乗の麁行に属するとは、兼学褒讃、実に以え有るかな。啻だ赤県神州の人師の判教のみに匪ず。月国、竺土の大士の論説も亦た爾なり。学者自ら知れ。抑我が門の行者等、須らく芭蕉の身体を厭いて、芙蓉の託生を欣うべきのみ。南無阿弥陀仏。

积文降魔勝 第三十四

夫れ以んみれば、一乗の真文は速やかに魑魅の厄難を払い、随求の一字は善く具縛の魂識を濟う。是れ則わち諸仏の密語、如来

の金言なる所以なり。人師の釈文に於いては未だ嘗て其の例を聞かず。然るに吾が高祖の釈文は八葉の幽峯に在ては、邪鬼の首を落とす、九重の洛城に於いては、疫神の頭を破る。然れば則ち、六十余州中の尊卑は一偈を怖畏の門に掛け、補陀落山下の群人は災殃を乾坤の外に払う。問うて曰く、今言うが如きは実には是れ奇特か、抑も亦た奇異か。請う、其の文を見て無上の信心を増長し成就せん。如何ん。答う。『般舟讚』に曰く、⁽³⁵⁾

門門不同にして八万四為るは無明と果と業因とを滅せんが為なり。利劔は即ち是れ弥陀の号、一声称念すれば罪皆除く上と。

此れ其の靈驗、難思の解釈なり。問うて曰く、此の文の靈威、唯だ従上四種の事に局るか。如何ん。答えて曰く、亦た之れ有り。武州の頼高、丹州の氏女、奥州の俊快、高野の行阿、摂州の信男、太原の翁婆、八瀬の童子、論主小僧、東関の靈驗、又た普甲の児童、成相なごあいの小僧、江州の下女等は皆、上の四句之偈を唱えて魔魅の難患を去く。此の以外、無量の勝利を聞くと雖も、名を失する

(35) 善導『般舟讚』(浄全四・五三上)。

が故に、是に註せざるのみ。問うて曰く、此の四句の文の中に如何なる妙義を明かせば無窮の靈徳を施すや。答えて曰く、此の文は広く三道有支の始終を断て二種の生死の愛河を渡り、干将利劍の尊号を持って九品淨刹の彼岸に詣でるの義相を明かすが故に、無量の勝徳を具して万端の靈驗を顯すものなり。問うて曰く、其の義如何ん。答えて曰く、今具に之を評判せん。所謂る「門門不同八万四」と言うは偏小権大、顯実密実、教外別伝等の諸法門を指す。即わち能治の法薬なり。「為滅無明果業因」とは十二因縁の因果を指す。即わち所治の疾療なり。此の二句十四字は是れ広く聖道の機法を撰するなり。次に「利劍即是弥陀号」とは尊号の利を用を以て、竜泉の徳能に譬う。次に「一声称念罪皆除」とは正しく称名滅罪の相を顯す。此れ即わち弥陀本願の玄極を談話し、釈尊出世の本懐を顯示するなり。然れば則わち此の四句二十八字は広く三世諸仏の教意を撰し、妙に聖道淨土の二門を包みぬ。實に是れ「一字含千理即身証法如」⁽³⁶⁾と謂いつべし。此れ等の妙義を内容するが故に現悉を望むの彙いは多く此の名文を持し、往生を求

(36) 空海『般若心経秘鍵』(正蔵五七・二下)。

むるの輩は皆、此の判釈に依る。於^あ、望む者は家毎に所願を成じ、求むる者は人毎に忽ちに仏迎を感ず。孰れの輩か崇重し、散華して父母に事うるが如くにせざらんや。何れの彙いか頂載し焼香して帝釈に事うるが如くにせざらん。居む者をや。問うて曰く、今具に解釈の靈験を聞きて信心を増長せり。重ねて句句の深義を示せ。之れを聞きて解了を生せん。答えて曰く「八万四」とは『大集經』に曰く、⁽³⁷⁾

一一の衆生に八万四千の諸行有り。皆能く了知す。所謂る貪欲の行に二万一千、瞋恚の行に二万一千、愚痴の行に二万一千、等分の行に二万一千あり。是れを八万四千の諸行とす。一一の衆生に皆是の行有り。若し広く説かば則ち無量の行有り。一一の行相門の中に八万四千の諸根有ることを知り、一一の根門の中に八万四千種の差別有ることを知る^{上巳}と。

又た、『報恩經』に云く、⁽³⁸⁾「衆生に八万四千の煩惱有り。之れを対治せんが為に、八万四千の法門有り」^{上巳}と。又た真諦師に一

(37) 『大方等大集經』(正藏一三・二〇二中)。

(38) 出典未詳、良忠『觀經疏伝通記』(淨全三・一二五七)に同文あり。

解有り。繁に依りて載せざるのみ。無明とは過去の二因なり。果とは現在の五果なり。業因とは現在の三因なり。現在の三因を擧げて未来の両果を顕す。故に此の両句二七字は広く十二縁起の相を明すなり。

問て曰く、十二縁起とは其の相如何。

答て曰く、且く『大方等大集經』に云く。⁽³⁹⁾

若し我れ惡の衆生に於て悲を修習すること能ずんば當に是の人の八種の苦相を觀ずべし。生苦乃至死苦なり^{至乃}。云何^{いか}なるか名づけて生苦を觀ずと為す。業因縁に於て從りて、父母和合して初めて意識を受く。歌羅羅の時は其の身猶し葶蘆子許りの如し。是の時未だ入出の氣息あらず。亦た苦と樂と不苦と不樂とを學知せず、先の色相を離れて、未だ後の色を具せず。力無く欲無く精進有ること無く、上色、上姓、上自在の相を憍慢すること有ること無く、五欲の相無し。諸根具せず、如の是きの衆生、我れ當に云何が憐愍を生ぜざるべき。如の是きの衆生の過去の愛取を名づけて無明と為す。過去の業有之

(39) 『大方等大集經』(正藏一三・一六九上、下)。

れを名づけて行と為す。初めて胎に入る心、之れを名づけて識と為す。歌羅羅の中の初色四陰を名づけて名色と為す。是の時未だ十二有支を具せず、因縁を生ずるを以ての故に。十二因縁有りと説くべし。衆生如の是し。何ぞ智者有りて憐愍を生ぜざらん。歌羅羅の時、住すること六七日なり。六七日転ずるを頻浮陀と名づく。是の時の形色は猶し小棗の如し。住すること七七日にして、転ずるを伽那と名づく。是の時形色は胡桃くるみ殻の如し。住すること八七日にして転ずるを閉尸と名づく。形色は猶し頻婆羅果の如し。是の時、身邊に五胞有りて出ず。謂く頭手脚十三の七日にして始めて腸相有り。二十の七日にして男女の根別る。二十一の七日にして始めて骨節を生じ、乃至三十六の七日にして其の身に肉血毛根を具足し、三十八の七日にして身枝を具足す。四日四夜、腸中臭穢の処に住せず。是の人は是の如し。我れ当に云何が憐愍せざるべき耶。爾の時、還た本生の事を憶す。憶し已りて愁苦し、是の念言を作く。若し我れ出胎せば当に善法を修し、

願くは後更に是の如きの処に生ずること莫く、不放逸を修して受生を遠離すべしと。始て母胎を出ず。爾の時、身を舉して迫迮の苦を受く。風入りて身に触るるに亦復た苦を受く。身初めて地に至るとき、水を以て摩洗するに復た大苦を受く。猶し地獄の如し。爾の時還て宿命の事を憶することを失す。生じ已りて復た老病死苦有りて随逐して捨てず。復た風病白水、黄水和合等の病有り。是の如きの四病を数各百一ありて常に之れに随逐す。是の故に名づけて生と為す。是れ大苦なり。既に生を受け已りて老復た随逐す。髪白く面皺みて智と慚愧とを失す。髪の毛希疎にして諸行陳故す。諸根衰熟して破れ易く壞れ易し。爛朽危脆にして唯、二味を貧す。所謂、鹹酢なり。能く安樂を壞して身根逼惱す。是れ大苦河なり。能く衆生の三世の壮色を破る。忘ること嬰兒の如く。狂うこと鬼著の如し、衆生是の如きの悪事を具足す。我当に云何が憐愍を生ぜざるべき、爾の時復た死の為に侵逼せられて、智慧と寿命と諸有とを失して諸陰を捨棄し身壞し命壞して四

大離散す。三世の衆生に寿命の怨みあり。一切の衆生、死法を成就す。我れ当に云何が憐愍を生ぜざるべき。爾の時、復た所不愛の物有りて、来りて親近す。所謂、寒熱、飢渴、悪人、悪獸なり。衆生是の如し。我れ当に云何が憐愍を生ぜざるべき。復た所愛別離すること有り。所謂、盛年賊宝、庫蔵寿命、父母妻子、親戚眷属、上妙六塵、衆生既に是の如き等の苦を受く。我れ当に云何が憐愍を生ぜざるべき。或は衆生有りて三世の中に於いて上の六塵を求むれども、得ること能わず、是の因縁を以て具に衆苦を受く^{上巳}と。

又た、『大方等大集經』二十四に曰く、⁽⁴⁰⁾

仏言く、善男子^{至乃}法輪を転ずること衆生の三種の道を壊さんが為の故なり。何等をか三道とす。一には煩惱道、二には苦道、三には業道なり。業道とは所謂る行有なり。煩惱道とは所謂る無明愛取なり。苦道とは所謂る識名色六入触受生老死等なり。如是き三道、何をか因縁として有なる。触縁の故に有なり。善男子眼に色を見るに因りて、愛心を生ず。愛とは

(40) 『大方等大集經』(正藏一三・一六三下) 一六四中。

即ち是れ無明を愛と為す。造業即ち名づけて行と為す。至心
專念する、之を名づけて識と為す。識、色と共に行ず。是れ
を名づけて色と為す。六処貧を生ず。是れを六入と名づく。
入に因て受を求む。之れを名づけて触と為す。貧著の心をば
即ち名づけて愛と為す。是れ等の法を求むる。之れを名づけ
て取と為す。是の如くの法生ずる、是れを名づけて有と為す。
次第に断えざる。是れを名づけて生と為す。次第に断ずるが
故に之れを名づけて死と為す。生死の因縁、衆苦に逼めらる
る之れを名づけて悩と為す。乃至識法の因縁、貧を生ずるこ
とも復た是の如し。是の十二縁は一人の一念に皆な悉く具足
す。出に三種有り。一には因出、二には物出、三には道出な
り。若し比丘有りて法行を修行せば、所有の愛心の相貌を觀
察すべし。比丘当に觀ずべし。若し愛心有るは即ち是れ無明
なり。無明の体、能く二の過を出す。一には行を出し、二に
は識を出す。識に亦た二有り。一には名を出し、二には色を
出すと。名色に亦た二あり。一には無住、二には六入を作す。

六入に亦た二あり。一には欲を厭わず、二に能く触を生ず。触に亦た二有り。一には愛心を生じ、二には受を求む。受に亦た二有り、一に苦樂を受け、二に貧心を生ず。愛に亦た二有り。一には繁縛堅固なり。二には取を求む。取に亦た二有り。一には貧心、二には有を求む。有に亦た二有り。一には樂住、二には因縁。縁に亦た二有り。一には生老、二には苦縁なり。老に亦た二有り。一に壯色を壊し、二に死因を作す。死に亦た二有り。一に壽命を壊し、二に愛別離なり。是れを出因と名づく。云何んが物出なる。若し比丘有りて、法行を修習せば、是の如きの法は亦たは出、亦たは滅なりと觀ぜべし。是れを物出と名づく。爾の時世尊、憍陳如に告く、云何んが道出なる。若し比丘道を見るに二種有り。一には行行、二には慧行なり。憍陳如、汝頗能く是の行行慧を知るや。憍陳如言さく、未だ知らず、世尊、唯だ願は如来、十二因縁を觀ずるが為に比丘大智慧を得て、諸の煩惱を壊せん。分別し解説したまえ。比丘聞き已りて当に具に受持すべしと。爾の

時世尊、宝幢童子に告わく、善男子、汝頗能く息の出入を知るや不や。不なり。世尊善男子法行の比丘、先ず無明乃至老死を觀ぜべし。云何んが名づけて無明を觀ぜと為す。先ず中陰を觀ぜべし。父母の所に於いて貧愛の心を生ず。愛の因縁をもつての故に、四大和合す。精血二滴合して一滴と成る。大いさ豆子の如きを歌羅羅と名づく。是の歌羅羅に三事有り。一には命、二には識、三には煖なり。過去世中の業縁果報は、作者及び受者有ること無く、初めて息の出入する、是れを無明と名づく、歌羅羅の時、氣息出入するに二種の道有り。所謂る母の氣息の上下に隨いて七日に一變す。息の出入をば名づけて壽命と為す。是れを風道と名づく。不臭不爛なる是れを名づけて煖と為す。是の中の心意、之れを名づけて識と為す。善男子若し辟支仏の果を得んと欲すること有らば、当に是の如きの十二因縁を觀ぜべし。復た三受の因縁、五陰十二入、十八界を觀ぜよ。云何んが觀と為す。念心に隨いて、息の出入を觀じ、内身の皮膚、肌肉、筋骨、髓腦は空

中の雲の如く是の身中の風も亦復た是の如しと観ずべし。風有りて能く上り、風有りて能く下り、風有りて能く満し、風有りて能く燋れ、能く増長すること有り、是の故に息の出入を名づけて身行と為す。出入の息は覺觀従り生ずるを以ての故に、意行と名づく。和合して声を出すを名づけて口行と為す。是の如き等の三行の因縁を以ての故に識生ずること有り。識の因縁の故に則ち四陰及び色陰有り。故に名色と名づく。五陰識行の六処に因縁たり。故に六入と名づく。眼色相對す。故に名づけて触と為す。触の因縁をもつての故に念色法に至る。是れを名づけて受と為す。色に貧著し、乃至法においてする。是れを名づけて愛と為す。愛の因縁をもつての故に、四方に求覓す。故に名づけて取を為す。取の因縁をもつての故に、後身を受く、故に名づけて有と為す。有の因縁をもつての故に生老死、種種の諸苦有り、是れを五陰十二入、十八界、十二因縁の大樹と名づく。是の故に出入の息を縁として能く一切の諸苦煩惱を生ず。是の故に凡夫生ずる時

を亦た煩惱繁縛と為す。死時も亦た爾なり。終に身心自在な
ることを得ること能わず、三昧を得ず、諸漏を尽さず^{上巳}と。

十二有支の相、梗概、斯の如し。

次に尊号不共の別徳を明す。中に利劔と言うは、広に云く、「劔
とは積名に曰く、劔は檢なり。非常を防檢する所以なり。広雅に
云く、「竜泉、太阿、干将、鑌鄒、断蛇、魚腸、純銅、燕支、葵偷、
属陳、于隊、堂谿、墨陽、巨闕、辟閭、並に劔の名なり。古今の
『註』に曰く、⁽⁴¹⁾

呉の大皇帝に宝劔六有り。一には曰く白虹、二には曰く紫電、
三には曰く辟邪、四には曰く流星、五には曰く青冥、六には
曰く百里と。

『列子』に曰く、⁽⁴²⁾

孔周に三の劔有り。一に曰く含光、二に兼影、三に曰く霄陳。

呉王、子胥に属鏤の劔を賜うて死す。周の穆王、銀鍔の劔有

り。玉を切ること泥の如し。居欠の切。^{上巳}

『礼部』に曰く、⁽⁴³⁾

(41) 崔豹『古今註』。

(42) 『列子』湯問篇。

(43) 『説文解字』卷十五「釈兵」。

劔は居欠の切、劔は檢なり。非常を防檢する所以なり。求劔を求め劔を撫でる^上と。

干鏝阿竜の靈徳、此の中、応当に広く説くべし。

「一声」とは『礼部』に曰く、⁽⁴⁴⁾

音は声なり。心に生じて、節、外に有る。之れを音と謂う。

宮商角徵羽は声なり。糸竹金石匏土革木は音なり。八音、五

音、德音^上と。

『声字義』に曰く、「⁽⁴⁵⁾声を發して虚しからず。必ず表物の名を表す故に字と曰う」^上。処処の經論に、十声一声、消除逆謗、定得往生、住不退轉^{云云}と曰う。是れ其の一声の巨益なることを。

「称念」とは『新編梵語』に曰く、「⁽⁴⁶⁾邪奢蚘に注がず。奢夜舎をば称と曰う」^上と。今、称念とは、口称と意念とに非ず。称即ち念、念即ち称なり。念即ち是れ声、声即ち是れ念の勘判、之れと合して知れ。

「罪皆除」とは、持名の一行に由りて逆謗犯重等の一切の罪障を滅す。故に曰うのみ。

(44) 『説文解字』卷四「音部」。

(45) 空海『声字実相義』（正蔵七七・四〇二下）。

(46) 出典未詳。

抑そもそも 又た此の四句は畜だ頭宗半満の諸教を摂するのみに匪ず。

亦た能く冥に四曼三密の教行に会す。所謂る此の四句は次の如く、西方阿弥陀の四親近の菩薩の行相に当たる。西方の四菩薩とは、法利因語の四大士なり。今、此の四菩薩を以て四句の偈に配釈せば、始めの一句は正しく法菩薩の行相に当たる。夫れ法菩薩とは西方の中、東方発心門の菩薩なり。一切の有情は本と不生性を有するが故に。一切の法門は皆な生界本有の義を詮するが故に「八万法門」の句に当たるなり。

次に利菩薩とは、西方の中、南方修行門の菩薩なり。修行をして満足せしむるが故に。「為滅無明」の句に当たるなり。

次に因菩薩とは、西方の中、西方菩提門の菩薩なり。大菩提を成就するが故に。所以に円成菩提の「弥陀号」の句に当たるなり。

次に語菩薩とは、西方の中、北方涅槃門の菩薩なり。不動如如智に入るが故に。語とは語声なり。故に「一声称念」の句に当たるなり。

又た法菩薩とは是れ円通大士なり。利菩薩とは曼殊薩埵なり。

因菩薩とは慈氏大聖なり。即ち『理趣經』所説の纒発心転法輪菩薩なり。語菩薩とは維摩大士なり。之れに依つて之れを言わば、觀音は是れ大悲法門の本土、妙觀察智の如来なり。故に「八万法門」の句に当たる。『觀經』に曰く「⁽⁴⁷⁾ 仏心とは大慈悲、是れなり。無縁の慈を以て諸の衆生を摂す」⁽⁴⁸⁾と。又た『金剛頂經』に云く「雄猛阿闍鞞最勝宝生尊、大悲阿弥陀、成就不空業」⁽⁴⁹⁾と。文殊は乃ち三世如来の智母、十方薩埵の教主なり。故に「為滅無明」の句に当たる。彌勤は是れ慈悲の化主、当來の導師なり。故に成就菩薩、弥陀覺王に当たる。浄名は乃ち無言の上に大法を説くが故に。「一声称念」の語業の句に当たるなり。

『金剛頂經』第四に曰く、⁽⁴⁹⁾

我れ今、金剛法を敬礼したてまつる。善利薩埵、真の大悲、善清浄の心は即ち三昧なり。觀音の変現、測るべきこと難し。觀世自在にして障礙無し。慈悲、能く比類するもの有ること無し。妙觀察智は十方に遍じ、妙金剛眼をもて一切を視る。金剛眼をもて慈福無量なり。金剛眼の名は灌頂を授く。我れ

(47) 『觀無量壽經』(浄全一・四四)。

(48) 不空訳『金剛頂經』(正蔵二〇・五二四上)。

(49) 覺超『金剛三密抄』(正蔵七五・六八〇中)に同文あり。

今、金剛利を敬礼したてまつる。摩訶衍那大乘の器なり。摩訶器、仗鎮に魔を摧く。文殊師利は慧猛利なり。金剛藏は法弁無窮、金剛甚深にして梵音美なり。金剛劍身、仏掌に住す。智慧神力を吉祥と名づく。金剛覺分、習氣を断ず。般若揮破して灌頂を授く。我れ今、金剛輪を敬礼したてまつる。摩訶理趣、纔かに発心す。金剛因の智、最も第一なり。大堅実の心、退敗し難し。金剛起、初めて法輪を転ず。金剛道場、応に随いて現ず。金剛輪身、仏掌に住す。金剛輪、微塵の仏を現ず。無量無数の諸の如来、纔かに発心するに由って法輪を転ず。金剛成就して不退輪なり。金剛眼輪、灌頂を授く。我れ今、金剛語を敬礼したてまつる。金剛念誦は音響無くして能く悉地自在の願を授く。無言に説説すること測るべきこと難し。金剛念誦、仏掌に住す。金剛、速かに聞持藏を獲る。金剛自在は成実の言なり。金剛智性、密語を暁す。金剛の上悉地、遇い難し。金剛言説、灌頂を授く^上と。

『菩提心論』に曰く、⁽⁵⁰⁾

(50) 不空訳『菩提心論』(正蔵三・五七三下)。

西方阿弥陀仏に四菩薩を撰す。金剛法、金剛利、金剛因、金剛語を四菩薩と為す^上と。

夫れ宗師の解釈、現当の靈驗を明かし、并に豎に三世如来の教理智断を撰し、横に顕密大法の行位因果を括ることを弁じ畢訖^{おわんぬ}。飛

錫禪師『宝王論』に曰く、⁽⁵¹⁾

問て曰く、人生れて世に在ること石火電光のごとし。一念蹉跎すれば、悔めども及ぶ所無し。修道の人は尚お心親しまず、況や身を親しまんや、尚を身を親しまず、況や身の外をや。常に恐るべし。出る息還らざれば、後世に属す。狂風飄蓬たり。茫茫として何くにか之^ゆかん。願くは一念十念の門、此生他生の計を示せ。答て曰く、齒を含み、髪を戴き、死生交際して未だ出入の息や無くんば有らず。又た一息還らざれば、即ち後世に属すとは、亦た誠に所問の如し。世上の人は多く、宝玉水精金剛菩提木榧を以て数珠と為す。吾れは則ち出入の息を以て念珠と為して仏の名号を称し、之を息に随うるに大とする^{たのみ}恃怙^{たのみ}有り。安ぞ息の還らずして後世に属することを懼

(51) 飛錫『念仏三昧宝王論』(正蔵四七・二三八中〜下)。

れんや。余は行住坐臥に常に此の珠を用ゆ^上已と。
南無阿弥陀仏。

廢立独妙勝 第三十五

夫れ葛扁は善く薬毒の殊を弁ずるが故に、能く人の万瘵^{むさ}を為
む。庸医は誤つて烏牛の文を解するが故に、妄に他の病疾を増す。
他門自家の判教の不同、其れ然らざらんや。宗師の勘判は是れ葛
扁が眼か。余賢の解釈は乃ち庸医の識か。何の言ぞや。夫れ以み
れば浄教を東流して自従り^{このか}以往た、宗旨を明すの彙、少なからず
教体を叙する者も多家あり。謂く或は念觀を混一し、或は助正を
混合し、或は中道を実相を以て教体と為し、或は尊号往生を以て
教体と為る等、是れなり。爰に吾が光明尊者は念仏を以て以て宗
と為し、往生を以て以て体と為し、三摩耶を以て肋行に属し、六
字名を以て正業と美^ほむ。是れ則ち不共の別徳、絶倫の嘉誉なるこ
とを。凡を義文を条録するに、妙に聖旨に会い、酬酢決扱するに
善く宗途に符す。是非を今古に格し、糺較を經文に殫し、先哲を

挫折して威八埏に振う。何の言ぞや。謂く、江淮の諸哲、同じく三部の妙典を判断すと雖も、未だ專雜二修の廢立は或^あらず。亦た正肋兩業の取捨を存ぜず、是れ即ち念仏勸励の文、惟れ少なきを無^なし、万行往生の説甚しく多きを執するの所以なり。是れ豈に牛膝の文を見て誤て野牛水牛を殺し烏頭の書を披きて妄りに慈烏短鳥を害せん愚医に異ならんや。夫れ雜往の文多きを宗^{たつ}び、專修の説少なきを無^なせば、譬えば千万の鑰匙を取りて十六の浮金を捨るが如くに相い似たり。孰れか智人と言わんや。此の解大いに仏語仏教に乖き、斯の義尤も弥陀の本願に背く。然るときは則ち斯れ等の淨典は、只ただ徒に箱底に朽ちて横に一世だも益せず、亦た、空しく庫中にのみ在りて豎に万代をも利せず。恐くは是れ無義無利の妄説なることを。爰に吾が家衆賢の判釈は然らず。夫れ玄忠尊者、去聖遙遠理深解微、聖道一種今時難証、の勘判を致したまひし自り已降^{このかた}。南北の衆賢、皆、難修難行の蜀道を捨て、易行易往の徑路に入り、光明大師、「念仏三昧、功能超絶、実非雜善、得為比類」の妙釈を為^{つく}りたまひし従り以往^{このかた}、西東の群英、俱に千

時三五の雑修を抛ちて、万不一失の妙行を取る。是れ即ち三会付属の金言を賞し、随他方便の権説を編みする所以なり。

此の高判は是れ深く仏意の玄底を探りて、説文の多少を忘るるのみ。夫れ金剛小しと雖も能く万物を碎き王子稚しと雖も百寮を威伏する。孰れか然らずと云んや。一家大いに廢立を存し、宗師尤も取捨を立つ。孰れの智人か之れに遵わざらんや。焉れの道者が之れを宗ばざらんや。

夫れ吾が高祖大師、聖説を結集して広く衢街を分かつ。文過ぎざれども華やかに、質甚だ而らざれども実あり。寔に是れ超生出死の神方、点鉄成金の妙薬なり。

古に曰く、(因)家に千里の驥有れば、(たから)珍ならず。人盈尺を懐かば和氏貴きこと無しとは、此れは一家不共の判教別徳を謂うか。抑(そと)『易』に云く、「書を言を尽くさず。言に意を尽くさず」と。之れに依りて之れを觀れば、大師、法水を流通うすること、万にして未だ一に足らず。然而るに、文、優美にして衆生の眼目為り。義、饒豊にして学者の依拠為り。意によるに其の書に載せざるの

言、唯だ等覺の居士のみ之れを弁じたまわん。其の言に尽くさざるの意、亦た無累の如来のみ之れを識りたまわん。於、宜べなるかな。遇う者、聞かん者、仰ぐべし、信ずべし。善男善女、廃すること勿く、忘るること勿れ。

伏して惟れば、大師の厚德、甚深難思なり。筭数も曼び巨く、恒沙も譬えに弗ず。爰に我れ今、由啻だ二、三、四、五の如来の所にして、清淨微妙の大善根を植わるのみに匪ず、已に無量阿僧祇の牟尼の前に於て爾許、若千の勝功德を作すに由りて、烏華一たび現じ、龜木相い値いて彼の法流を挹みて、此の朽林を潤すこと、曠劫の大慶、只だ斯の事に在り。順次の即詣、那んの疑か有らんや。

抑、吾が大師は、生を五滓の世界に誕じて、迹ら四依の随一に紹ぐ。生知の量に稟けて、天縦の才を蘊む。拔萃して孤り立ち、超倫して独歩す。進具より以往、踵を真宗に旋すに、四遠、風に望みて堂に盈つること千計、履歴談対するに、衆、咸く杜黙し、他家を立破するに方に智剣を揮う。故に敢えて其の鋒銳に当たたる

もの莫し。法門を挙揚する毎に銖にして之れを称あげざるに巍巍たり。極致を演暢する毎に寸にして之れを度らざるに、蕩蕩たり。学声行望の連布すること、雲峯ごうの若く、行光慧灯の栄曜たること、日月に逾えたり。心を物外に置くと雖も、身、人寰を厭い、跡を終南に隠すと雖も、名、天下に振るう。之れを見れば飛竜の如く、之れを聞けば獅子に似たり。大凡そ摂化七十祀の間は盲者も視ることを得、聾者も能く聴き、瘖者も能く語り、跛者も能く行く。寔に是れ三界の導師なり。抑、亦た四生の倚頼とする者をや。夫れ物に善悪有り、人に賢愚の殊あり。麒麟鸞鳳は、禽獸の奇秀たる者なり。摩尼金剛は金石の靈異なる者なり。人の挺粹なるは賢聖なり。帝の称首たるは堯舜なり。後の美たるは文母なり。臣の歎ぜらるるは元凱なり。人師の最なるは吾祖なり。僧史の明文に漢明夢を感じ、大法東流より以往このかた、未だ吾光明尊者の智德行徳の盛んなるに等きは有らずとは、此の意なり。大師の独り此の称譽を得たまえることは、正く是れ廢立の一門を建てて、尊号超絶の義を判じ、取捨の教相を存じて雑修難生の旨を詳にするに由り

て、然なり。

請い問う、之れ曰く。三密大教の天下に盛んなることは、是れ余教を以て外道と名づけ、他宗を以て無明に属する所以なり。一乘円宗の率土に盈ちることは、乃ち余教を以て邪見と名づけ、他家を以て麤人と下す所以なり。自余は之に準じて知れ、大師の激歎に曰く、⁽⁵³⁾

道場を時に逢うこと難く、遇い叵し。無常迅速にして命停り難し。眼前の業道、人人見る、皆三毒に由て因縁を作す^{上巳}と。

如来歎発して言く、⁽⁵⁴⁾

若し善男子善女人有りて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持すること若は一日、乃至七日、一心に不乱なれば、其の人命終る時に臨で、阿弥陀仏、諸の聖衆と与に現に其の前に在す。是の人終る時、心顛倒せず、即ち往生することを得^{上巳}と。

念死念仏の妙行は定生端的の秘要なり。南無阿弥陀仏。

(53) 善導『法事讚』（浄全四・二頁下）。

(54) 『阿弥陀経』（浄全一・五四頁）。

詳するに夫れ起悪駛雨の凡類、八篇十重の戒律を持すること、甚だ難く、欲界散地の衆生、三摩鉢提の静慮に入ること復た難し。然るに、一たび安養の淨刹に到れば、作意せずして自然に微妙の五分を具え、劬勞せずして任運に断難の三妄を断つ。勤求出道の人、孰か西方の往生を願わざらんや。

問て曰く、其れ実に自然に三学を備え、任運に断徳を具せば、是れ則ち不共殊絶の別徳なればなり。尤も以て珍敬するに足りぬ。其の義出でて何の処に在りや。乞う、其の誠文を見て、以て信心を増長し成就せん如何。

答て曰く、自然の三学と云うは、逝多林会の『無量寿経』に曰く、⁽⁵⁵⁾

舍利弗、彼仏の国土に微風吹きて、諸の宝行樹及び宝羅網を動じて、微妙の音を出だせり。譬ば、百千種の樂を同時に俱に作すが如し。是の音を聞く者は、皆な自然に念仏念法念僧の心を生ず^{上巳}と。

又た、鷲峰山頂の『阿弥陀経』に曰く、⁽⁵⁶⁾

(55) 『阿弥陀経』(浄土・五三頁)。
(56) 『無量寿経』(浄土・三三頁)。

徳を為し善を立てよ。正心正意にして齋戒清浄なること一日一夜するは無量寿国に在りて、善を為すこと百歳するに勝れたり。所以は何ん。彼仏の国土は無為自然にして、皆衆善を積み、毛髪の悪無きなり。此に於て善を修すること十日十夜すれば、他方の諸仏の国土に於て善を為すこと千歳するに勝れたり。所以は何ん。他方の仏国は善を為す者は多く、悪を為す者は少し。福德自然にして造悪無きの地なり。唯此の間のみ、悪多くして、自然なること有ること無し。勤苦求欲して転た相い欺給す。心勞し、形困じて苦を飲み毒を食う。是の如く恩務にして未だ嘗て寧息せず上と。

『法事讚』に曰く、⁽⁵⁷⁾

既に華台を見て心踊躍して仏に従て逍遙として自然に歸す。自然とは即ち是れ弥陀国なり。無漏無生にして還た即ち真なり^上。

『安樂集』に曰く、⁽⁵⁸⁾

又た勸て衆生の与に善知識と作ると雖も、必ず須く西に歸せ

(57) 善導『法事讚』（浄全四・一八頁下）。

(58) 道綽『安樂集』（浄全一・七〇八頁下）。

しむべし。何を以ての故に、斯の火界に住すれば、違順の境多きに由りて多く退没すること有りて、出で難き故なり。是の故に舍利弗は、此に於て発心して菩薩の行を修すること已に六十劫を経たり。悪知識の乞眼の因縁に逢いて遂に即ち退転す。故に知りぬ。火界にして道を修すること甚だ難し。故に勸て西方に帰せしむ。一たび往生することを得れば、三学自然に勝進し、万行普く備る。故に『大経』に云く、弥陀の浄国は造悪の地の毛髪許りの如きも無し^上と。

『礼讃』の序に曰く、⁽⁵⁹⁾

彼の国に到り己れば更に畏るる所無し。上の如きの四修、自然任運にして自利利他具足せずと云うこと無し^上。

又た、清了禪師の『浄土説』に曰く、⁽⁶⁰⁾

經に曰く、若し人、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持すること若しは一日、若しは二日、七日に至るまで一心不乱なれば、即ち極楽国土に往生することを得^{至乃}と、即ち『楞嚴經』に仏を憶し仏を念ずれば、現前当来に必定して見仏す。方便

(59) 善導『往生礼讃』（浄全四・三五六頁上）。

(60) 清了『浄土説』・散逸。『浄土或問』（正蔵四七・二九六頁中）などに逸文がある。

を仮らずして自ら心開くことを得と、中下の二機を連攝するの義なり^上已

又た『般舟讚』に曰く、⁽⁶¹⁾

微塵の故業、智に随いて滅す。不覺に転じて真如門に入る。大小僧祇恒沙劫も亦た彈指須臾の間の如し。此の如く逍遙快樂の処、更に何の事を貪るか。生を求めざる^上已と。

己上自然三学の義を答え竟ぬ。

又た『法事讚』に云く、⁽⁶²⁾

彼に到りて華開きて大会に入れば、無明煩惱自然に亡す。三明自然なることは仏願に乗ずればなり。須臾に合掌して神通を得。

又た云く、⁽⁶³⁾

釈迦諸仏の恩を慚愧せよ。標心^{こころざし}為に西方の樂を説きたもうことは、齊く歸して正門に入らしめんと欲すればなり。正門は即ち是れ弥陀界なり。究竟解脱して根源を断つ。去来^{いさま}他郷には停まるべからず。仏の歸家に従いて、本国に還り、一切の

(61) 善導『般舟讚』（浄全四・五三二頁下）。

(62) 善導『法事讚』（浄全四・二〇頁上）。

(63) 善導『法事讚』（浄全四・二九頁上）。

行願自然に成ぜん^{上巳}と。

任運断惑の義を答え訖ぬ。此の例一に非ず。自余は学者自ら知れ。夫れ以れば、若し、此方修治の断除に依れば、尸羅持ち難く、静慮修し叵きが故に、遙に三十三阿僧祇劫を経て、然後、始めて果性果果性の高台に登る。若し西方浄土の断証を論ずれば、自然に十度を具足し、任運に三惑を断除すること、焉ぞ思議すべけんや。

難じて曰く、夫れ戒珠^{きしゆ}玷^{きた}有れば、無明の長夜を照さず、定水澄まざれば覺月の靈光を浮かめず。慧灯光無くして生死の重昏を明かにせざること、是れ即ち五濁の穢界に住して、悪境甚だ強く、修心尤も弱きに由りて爾なり。然るに、十方の浄土には五障の女質も無く、亦た乞眼の知識も無し。故に三学自然に之れを具足し、二障任運に之れを断除せん者か。若し爾らば三学自然の勝徳、豈に西方一土のみに局らんや。所以に『大経』に曰く、⁶⁴「諸仏国土、福德自然」と云えり。如何。

答て曰く、十方の浄蔽には乱想の凡夫寄託するに由無し。故に

(64) 羅什訳『無量寿経』(浄全一・三二頁)。

多くは賢聖の菩薩に就きて、以て三学自然の義を論ず。西方の一土は一切善悪の凡夫、生ずることを得るが故に全く底下の異生に就きて、以て五分任運の旨を弁ず。其の優劣判然たり。智人自量せよ。矧いけんや又た、三世の如来は或は是れ弥陀覚王の分身なり。又た即弥陀智母の所生なり。若しは本仏に就きて之を論じ、若しは能生に就きて之れを語わば、諸仏他土の利益は正く是れ弥陀淨刹の一徳に帰嚮するのみ。寒山詩に曰く、⁽⁶⁵⁾

誰家にか長く死ざらん。死の事旧来均し、始めて憶う八尺の漢、俄に一聚の塵と成る。黄泉暁る日無く、青草時有て春なり。行き到りて心を傷むる処、松風人を愁殺せしむ上と。

夫れ生死の寒天には尊号の瓔珞、是れ妙服たり。輪廻の飢苦には念仏の法味乃ち甘露なり。南無阿弥陀仏。

持念超経勝 第三十七

夫れ以れば、唯だ本草和劑の方経を読むときは則ち衆瘵除瘥すること大いに難く、兼ねて擣篩和合の良薬を餌べるときは則ち万

(65) 『寒山詩闡提記聞』 卷一・三七丁オ。

疾愈差することは易し。唯だ語に説衣食を説くときは則ち飢寒を除くこと惟れ難く、正しく味衣を服餐するときは則ち飽足を致すこと惟れ易し。称名と誦経との所得の功德、其れ然らざらんや。王宮所説の『阿弥陀経』に曰く、⁽⁶⁶⁾

下品上生とは、或いは衆生有りて始めに大乘修多羅の章句を持誦すれども、罪未だ尽きず。後、南無阿弥陀の宝号を唱念して、障り悉く除くる故に。化仏、持経の功德を讚せずして、称名の功用のみを褒揚す。行者、化讚を聞き已りて即ち如来の後に随いて宝蓮の上に遊ぶ、と。

『念仏鏡』に曰く、⁽⁶⁷⁾

問う、経を読む功德は念仏の功德より多少ぞや。

答う、読経の功德は亦た念仏の功德よりも少なし。大行和上の説かく、経を読むは猶し薬方を読むが如く、念仏は猶し薬を服するが如し。薬方を読むには病即ち除き難く、薬を服すには病則ち差え易し。読経修道の功德は亦た念仏の功德の正しく是れ修道なるより少なし。此の事を以ての故に功德最

(66) 量良耶舎『観無量寿経』（浄全一・五〇）の取意か。

(67) 『念仏鏡』（正蔵四七・二二九上）。

も多し。問う、経を講ずる功德、念仏の功德より多少いくばくぞや。答う、講経の功德は亦た念仏の功德より少なきこと、百千万倍なり。何を以ての故に。講経は猶し宝を数うるが如く、念仏は猶し宝を用ゆるが如し。宝を数うること多しと雖も、貧苦を除かず。宝を用ゆることは多からずと雖も、功德を得ること無量なり。罪を滅すと言わず。功德を得と言わず。明らかに知んぬ。念仏の功德より少なきこと、百千万倍已上なりと。又た云く、⁽⁶⁸⁾

第四に念仏対講説門に問う、阿弥陀仏を念ずる功德は聞経の功德より多少いくばくぞや。

答う、念仏の功德は聞経の功德より多きこと百千万倍なり。何を以てか知ることを得る。『観経』の下品上生の人、悪として作らずということ無く、悪を造るに由るが故に。命終わらんと欲する時、地獄の衆火、一時に俱に至る。善知識に遇いて為に十二部経を説くに、彼の人、聞き已りて千劫等の罪を滅除す。経を聞く力、少なくして、地獄猶お未だ滅せず。

(68) 『念仏鏡』(正蔵四七・二二九上)。

智者の教えて阿弥陀仏を念ずることを得て十口するに、八十億劫生死の罪を滅除す。多く能く身命を濟う。講經は亦た石を磨するが如く、少分の利益を獲て尽く他人に与うと雖も、自損無量なり。為に礼拝供養を受けて大いに果報を損す。所以に『論』に曰く、譬えば貧窮の人、昼夜に他の宝を数うるに自ら半錢の分無きが如く、多聞も亦た是の如し。故に知んぬ、講經の功德は念仏の功德より少なきこと百千万倍なり。何を以てか知ることを得る。『唯識論』の如きは、多く我を計することを破す。講論の者、ひと口に法を説くと雖も、心に多く我を計す。我を起こさざる者は万が中に一りも無し。所以に『法華經』に曰く、我慢をもて自ら矜高し、諂曲にして心不実なれば、千万億劫に於て仏の名字を聞かず、亦た正法を聞かず。是の如きの人は、度し難し、と。是の事に由るが故に。講論は念仏に如かざること百千万倍なること。所以に上世に懷感法師、智仁法師、蘊法師有りて皆な講論を捨てて同じく念仏に歸す^{上巳}と。

難じて曰く、『法華』『華嚴』『般若』『小品』等の大乘の衆典の中に読誦解説等の五種の妙行を挙げて疾成菩提の正因と結歎し、披読誦等の十種の法行を出だして、功德無辺の妙行なりと褒讃すること其の説一に非ず。今、粗ぼ五三を出だして其の義を示さん。且らく『法華』の第六に曰く、⁽⁶⁹⁾

若し我れ宿世に於て此の経を受持し読誦し他人の為に説かず
んば、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得る こと能わず。 至乃 是
の故に諸の菩薩摩訶薩、如来の滅後に於て常に応に是の経を
受持し読誦し解説し書写すべし、と。

又た云く、⁽⁷⁰⁾「何に況んや見ることを得。受持読誦せんをや」。又
た云く、⁽⁷¹⁾

是の経を読まん者は常に憂惱無く、又た病痛無けん。 至乃 遊行
するに畏れ無きこと師子王の如く、智慧光明は日の照らすが
如くならん⁽⁷²⁾と。

『論註』に曰く、⁽⁷³⁾「名、法に即すとは、諸仏菩薩の名号、般若波
羅蜜及び陀羅尼の章句、禁咒の音辞等是れなり」<sup>乃至
広説。</sup>

(69) 羅什訳『法華経』（正蔵九・五一上〜中）。

(70) 羅什訳『法華経』（正蔵九・二八下）。

(71) 羅什訳『法華経』（正蔵九・三九下）。

(72) 曇鸞『往生論』（浄全一・二三八下）。

又た弘法大師の『秘蔵宝籙』に曰く、⁽⁷³⁾

外書は百姓の文の如く、仏経は天子の勅の如し。是の故に釈帝、之れを誦して修羅の軍を摧くや。閻王、之れに跪ずいて受持の人を礼す^上已。

『法華伝』に曰く、⁽⁷⁴⁾

僧の道慧は蜀の人なり。少くして父母に喪れ、兄に従いて養大す。昼夜に悲哭して其の父母を恋慕す。生年九歳にして師に従いて法華を誦通して其の脱苦を祈請す。誦すること一百部に満つるとき夢みらく、福成寺の上空に殊特の光有り。漸らく庭に近く忽ちに天有るを見る。百千の天衆、而も之れを圍遶す。道慧に告げて言く、吾れは是れ汝が双親なり。誦経の力に依りて第二の天に生じて、悪趣の怖れを脱す。若し誦すること千部に満たせば、必ず浄土に生ずべし。当に知るべし、親子の契り深くして、来謁して情を陳ぶ、と。是の語を作し已りて、隠れて見えず。覚悟て倍信を生じて重ねて彌専ら諷誦す。聞く者、展転して父母の脱苦の為に経を誦する

(73) 空海『秘蔵宝籙』（正蔵七七・三六七中）。

(74) 僧詳『法華伝記』（正蔵五一・六七中）。

に夢告を感ずること益し多し。略して述せざるのみ^上と。

読經の功德甚深殊絶なること斯の如し。『法華玄義』に『浄名』を引いて曰く、⁽⁷⁵⁾

説法浄きときは則ち智慧浄しと。『毘曇』に云く、説法解説、聴法離脱と説法開導するは是れ前人の得道の全因縁なり。化の功已に歸して十心則三倍にして転た明なり^上。

荊谿尊者の云く、⁽⁷⁶⁾「説法の力、内に自智を薰するを以て倍、^{まます}清浄ならしむ。化功歸已の意、斯に在り」^上と。『法華』に曰く、⁽⁷⁷⁾「能く竊に一人の為にも『法華經』を説かん」^文等『浄名疏』に曰く、「微遠の種をいわば、畜生道の中の久遠の一句、尚お因と為ることを得。況や復た講を聴きて講説せん者をや」^上。『法華伝』に曰く、⁽⁷⁸⁾

釈の僧隆法師は、何れの所の人と云うことを知らず、貞觀年中を以て北道従り北印度に出でて、勸化せんと欲す。更に中天竺に於て梵本『法華』を誦得して健陀羅国に到りて自ら講を開くに四方雲の如くに馳集し万群星の如くに朝望す。後、疾に遇て死す。三日を経て蘇起して曰く、吾れ閻魔天子に見^{まみ}

(75) 智顛『法華玄義』（正蔵三・三七三・中）。

(76) 湛然『法華玄義積懺』（正蔵三・三八八・中）。

(77) 羅什訳『法華經』（正蔵九・三〇下）。

(78) 智圓『維摩經略疏垂裕記』（正蔵三・七三七・中）。

(79) 僧詳『法華伝記』（正蔵五・一五七下）。

ゆ。問う、道人何なる功德か有りや。答う、法華を誦得して自ら講肆を開て衆生を勸化すと。王の曰く、誦誦は是れ真実なり。講説は浮虚にして情に随て分別す。豈に勝功德ならんや。答う、誦誦は自を専らにし、講説は恵施す。利物は是れ菩薩の懷、豈に浮虚にして功德無きとは王歎喜して座従り下り、長跪して言く。善哉善哉よきかなよきかな、汝高座に昇て將に其の義を講説せよと、隆即ち高きに昇て題を唱え、義を開くに、庁中の罪人、隆が声の及ぶ所、離苦得樂して枷鎖自ら解け。或は人天に生ず。王の曰く、やみねやみね止やみね止、汝命未だ尽きず、還て本身に到れと。即ち随て路に歸て蘇ることを得と、当に知るべし、妙法は人天の要行、菩提の直道なり。専心専行して懈怠すること莫れと。聞く者、涙を流して殷重の心を生ずること蓋し多し。凡そ見聞の者ひと、少を捨てて大に歸す上と。

夫れ漢家本朝の『法華伝』中に、誦誦解説等の功力を出すこと一に非ず。文繁こきが故に於是之れを戴せず。又た、『龍舒が浄土文』に曰く、⁽⁸⁰⁾

(80) 王日休『龍舒浄土門』(浄土全六・八六九上)。

唐の房翥、翥暴死して陰府に至りて閻魔王を見ゆ。王の曰く、案簿に拠るに、君曾し、一の老人に勧めて念仏せしめ、已に浄土に生ぜしむ。君、此の福を承く。亦た浄土に生ず合うべし。故に召し来たりて相い見ゆ^上と。

又た『観経』には、⁽⁸¹⁾「勸進行者を以て九品往生の正因と為す」と説き、『法華』には、⁽⁸²⁾「五十転聞を以て八十箇廻の檀度に勝れり」と明す等、亦た是れ講経功用の殊絶なることを顕示するのみ。若し爾らば講読の慧業を以て卑劣の小徳と為ること豈に衆典の現文に乖くにあらずや。

答て曰く、此の難不類なり。誰か云うや、五種の妙行を勤めて二世の巨益を得ること無しとは、夫れ従上所引の文意は、^{ただただ}只是れ独歎独讚の意にして未だ必ずしも念仏の功德の功力に相對して以て其の優劣を勘判せず。今、論釈の意は二行相望して以て其の高下を批評するのみ。或は又た無解の読経名利の講論は未だ修行觀念の岸に至らず、猶、名句文身の筏留る人に約して以て語ることを為す。且く『円覚経』に曰く、⁽⁸³⁾

(81) 置良耶舍『觀無量壽經』「三者發菩提心、深信因果、誦讀大乘、勸進行者、如此三事、名為淨業。仏告韋提希、汝今知不、此三種業過去未來現在三世諸仏淨業正因」(浄全一・三九)の取意。

(82) 羅什訳『妙法蓮華經』(正藏九・四六下)の取意。

(83) 仏陀多羅訳『大方広円覚修多羅了義經』(正藏一七九・一七上)。

修多羅の教は月を標す指の如し。若し復た月を見て所標は畢竟じて月に非ずと一切の如来、種種の言説をもて菩薩を開示することも了知す。亦復た、是の如し。此れを菩薩已入地の^{ひと}者の随順覚性と名く^上と。

又た、『首楞嚴經』に曰く、⁽⁸⁴⁾「多聞有りと雖も、若し修行せざれば、不聞と等し、人の食を説くに、終に飽くこと能わざるが如し」^上と。学者知ぬべし。問う、上來は已に唯披読諷誦、講經談論のみにして未だ妙解妙行の位に至らざるの人、其の功德の微淺なることを聞きつ。若し觀解相應して經を読み、經を講ぜば、其の功用尤も甚深なるべき者か、且く『法華文句』に曰く、⁽⁸⁵⁾「又た法華の文を信ずるは、則ち実相の本を見るなり」^上と。又た、『法華玄義』に曰く、「大乘の文字を讀誦す。文字は是れ法身の氣命なり。讀誦明利なるは是れ円家の数息停心なり」^上と。⁽⁸⁶⁾妙樂大師の云く、⁽⁸⁶⁾

文字は是れ法身氣命と言うは、例せば欲界有漏の色身、息住すれば命住し、息尽きぬれば命尽きるが如し。法身も亦た然

(84) 般刺蜜帝訳『首楞嚴經』（正蔵一九・一〇九上）。

(85) 智顗『法華文句』（正蔵三四三下）。

(86) 湛然『法華玄義釈懺』（正蔵三三・八八八下）。

なり。能證の教有れば、法身則ち住し、大乘の教没せば法身
豈に存ぜんや^上已。

又た、内薰自智、令倍清淨の解釈、説法淨則、智慧淨の所判や、
智慧光明如日の照の經文等は皆な觀慧相應の誦經講演の功德の絶
妙なることを顕示す。若し此の如き講經誦典の功德を以て、念仏
に比對して其の功用の多少を論ぜば、豈に念仏の功德よりも劣る
と云う容けんや、如何。

答て曰く、猶お以て劣なりと為す。然る所以は、是れ則ち非本
願の行なるが故に雜修雜行なるが故なり。此の義、『双卷』及以
び『觀經』等に出でたり。學者知りぬべし。夫れ以れば吾等^{わなみ}一切
衆生、九方の淨域を捨て、西方の一土に歸せんより以降^{このかた}、九蓮名
を誌るすこと惟し年尚し、五雲軒に縈らんこと、正く幾^{ちかき}に在る者
なり。誰か之れを喜ばざらんや。玄奘三藏所訳の漸誘釈に云く、⁽⁸⁷⁾

若し夫れ財を蓄え、利を求るの意は身を養い、命を継がんが
為なり。公に事^{つかまつ}り、私を勤るの本は、徳を立て、名を揚げん
と欲するなり。然るに偏に一生の利を貪れば、必ず万代の害

を被る。現前の楽を求むれば、定で来世の苦を受く。今、家に珍宝を積み、国に宗族満つと雖も、病賊雲の如くに集り、殺兵風の如くに来るときは則ち一財も留まらず。一族も相い親近せず、是れ皆な苦器なり。終に無常の道に歸し、業風迫して来れば四大別離す。千色を以て蔽ると雖も、悪むべき氣、尚臭し。百味を以て養うと雖も、徒に棺中に朽爛し膿血九穴より流れて臭香八方に散ず。親愛の妻子も鼻を掩うて悪厭し、同心の朋党も唾を吐きて兼て去る。是れ甚だ賤き身なり。白虫九穴に蠢き青蠅膿の上に飛ぶ。死骸は林野に留めて以て塵灰と成り、神識は中陰に付て以て所宿を求む^上と。

嗚呼貴きかな、尊号摩尼の絺紵は速に八熱の苦を除き、念仏珍御の貂狐は忽に八寒の憂を治す。南無阿弥陀仏

攘災招福勝 第三十八

夫れ原るに除療増福は是れ一切有情の希求する所なり。魍魅厄難は乃ち六合異生の恐怖する所なり。然るに吾が弥陀世尊は畜出

世の大医として能く塵勞垢習の痼病を治し玉うのみに匪ず。亦た世間の良医として善く定業難転の重疾を療し玉う者をや。増息敬調の現利を求んの人、誰か無量寿の大醫に帰嚮せざらんや。且く『安樂集』に曰く、⁽⁸⁸⁾

弥陀釈迦二仏比較とは、謂く此の仏、釈迦如来は八十年世に住み玉う。暫く現じて即ち去る。去を返り玉わず、忉利の諸天に比するに一日にも至らず、又た、釈迦在せし時救縁弱し、毘舍離国にして人の現患を救い玉いし等の如し。何んとなれば、時に毘舍離国の人民五種の悪病に遭えり。一には眼赤く血の如し、二には両耳より膿を出す、三には鼻中より血を流す、四には舌嚙つぐんで声無し、五には所食の物化して麤澁となり、六には識閉塞せること猶し酔人の如し。五夜又有り、或は訖拏迦羅と名づく。面黒きこと墨の如く五眼有り。鉤牙上さまに出でて人の精気を吸う。良醫耆婆其の道術を尽せども、救うこと能わざる所なり。時に月蓋長者なるもの有りて首と為す。病人を部領して皆来て仏に歸して頭を叩て哀を求

(88) 道綽『安樂集』(淨全二・七〇四下)。

む。爾の時世尊、無量の悲愍を起して病人に告て曰く、西方に阿弥陀仏、觀世音大勢至菩薩有り、汝等一心に合掌して見たてまつらんことを求めよ。是れに於て大衆皆な仏勸に従て合掌して哀を求む。爾る時に彼の仏、大光明を放ち、觀音大勢一時に俱に到りて大神咒を説き玉うに一切の病苦皆な悉く消除して平復すること故の如し。然に二仏の神力、応に齊等なるべし。但し釈迦如来、己が能を申べたまわずして、故らに彼の長を顕て一切衆生をして莫らしめんと欲す。齊く歸せずと云うこと。是の故に釈迦、処処に歎歸し玉うこと、須く此の意を知るべしと。

又た『理趣釈』に曰く、「若し人、此の一字の眞言を持ては能く一切の災禍疾病を除く。命終已後に当に安樂国土に生じて上品上生を得べし」と。炳文義を載せて掲焉なり。下語するに及ばず、又た西方の行者の上に於ては護念増上縁の義有ること、此の中に応當に広く之れを説くべしと、又た、無量寿如来を以て以て本尊と為して息災の護摩を修すること有り。此れ亦た壊災殊勝の意な

(89) 不空訳『大樂金剛不空眞実三昧耶經般若波羅蜜多理趣釈』(正藏一九・六一・二中)。

るをや。

問て曰く、顕密の経軌を案ずるに、広く六観世音、八大観音に三毒七難、皆離二求、両願悉満の本誓有ることを明す。若し爾らば、此の一勝、更に成立せず、如何。

答て曰く弥陀大悲門の利物を以て観自在尊と名づけ、妙雲大智門の済生を以て大勢至尊と号せり。之れを以て之れを觀れば、觀音大士の巨益は全く是れ無量寿如来の妙徳なることを。抑、又た止ただ弥陀一仏の大悲を以て觀世音菩薩と名づくるのみに非ず。三世慈尊の悲心利生の事も皆同じく円通大士の悲化に帰在す。夫の伽栗斯山中の妙文に我れ六臂莊嚴の体を現ず、大悲誓願の深きこと海の如し、劫を経て無量阿僧祇、衆生を悲愛すること一子の如し、今世後世に能く樂を施す、三世諸仏の慈悲の水、皆融し皆円にし、皆凝湛して悉く我が独の大悲海に入ると宣べたる。誠諦の金言、思て知るべし。

問て曰く、三世十方の諸仏等、皆同じく四種の勝益を施し普く一切の群類を利すと。若し爾らば豈に阿弥陀のみ独り攘災招福の

巨益を施さんや。

答て曰く、誰か云う、哉弥陀独り利して余仏に全く無しとは俱に其の益有りと雖も、只其の高卑を論ずるのみ。ただた矧や十方の調御は正た極樂界より出でたり。若し末を以て本に歸して以て其の徳用を論ぜば、諸仏四種の巨益は全く本仏弥陀の勝徳に歸す。夫の子弟子庶卿大夫諸侯天子等、各其の功を以て次第して本に讓るが如きのみ。又た解すらく、藥師如来は正く十二の上願を成就して専ら四種の勝益を施与し玉えり。然るに一論の意に依て二六上願の元起を温ぬれば、修行願成は太皇太后の修功に似たりと雖も、最初の本誓は正く弥陀覚王の大悲水より出でたり。若し之れに依て之れを言わば、十二大願の現世を利する。豈に異人の本誓ならんや。正く是れ法藏薩埵の悲願なることを。原るに夫れ吾が無量寿如来の瑞光を舒べて以て毘舍を救い玉うは、是れ衆病悉除の誓約を逐げんとなり。医王婆伽の八士に勅して以て西路を示し玉うは、乃ち引接安養の本願を扶んとなり。若し爾らば、一切如来の攘災の利益は全く是れ西刹教主一仏の靈徳に歸趣するのみ。

智人思察せよ。智人思察せよ。有処に曰く（檀那の積なり）五塵六欲は貪染するに暇らず、人命は無常なり。此の身何ぞ保たん。一息追わざれば千載長く往きぬ。幽途綿邈として資糧有ること無し。苦海悠深として船筏安んぞ寄せん。賢聖に訶弃せられて恃怙する所無し。冥冥として独り往く。誰か是非を訪わん。譬えば野忽に頭を断れんことを聞くが如く、牛を駈けて屠所に至るが如し。年事稍去り、刀風奢からず、豈に晏然として坐して酸痛を待つべけんや。南無阿弥陀仏

説時説処勝 第三十九

詳するに夫れ三五夜の新月、景を明石の浦浪に宿すときは、則ち其の光弥朗に十八公の老松、高砂の尾上に行を為すときは、則ち厥の名、倍高し。吉野泊瀬の桜華は其の価直是れ千金、立田小倉の紅葉は厥の感興迺ち万端なり。此の四つの物は処に由りて其の佳名を得たる者をや。吾が宗の三部の妙典、其れ然らざらんや。原るに夫れ耆崛は衆聖設化の壇場、孤園は諸仏転輪の靈砌、

摩訶陀国は十六国に卓犖し、王赦城都は六大城に超絶せり。且つ
処の最勝なるは是れ王家、人の尊貴は乃ち皇后なり。爰に別意
六八の秋月は光を鷲峰山の巔いただきを耀かし、持名七朝の春華は薰を逝
多林の梢に発す。亦またまた仏従口出の靈光は専ら泚沙大王の玉弁を照
し、尊号妙行の葵華は正しく毘提夫人の後宮に開く。之れを以て
之れを言わば、吾門の三部は是れ諸教の最頂なる者か。

請い問う。曰く、『法華論』に云く、⁽⁹⁰⁾

此の法門の中に二種勝義成就を示現す。此の義応に知るべ
し。何等をか二と為す。一には諸法門中の最勝の義成就を示
現し、二には自在功德の義成就を示現す。王舎城の如きは一
切諸余の城舎に勝れ、耆闍崛山の余の諸山に勝れたること、
此の法門の最勝なる義を顕すが故に^上と。

山王院大師『論の記』に曰く、⁽⁹¹⁾

「初如王舎勝」等とは、且く能統を擧ぐ。一天下に於て、王
舎城を以て最も其の上と為す。摩揭中天の国は三千の日月中
央に居し、即ち五天の正中なり。此の城最中なれば輪王累代

(90) 菩提流支訳『法華経論』（正蔵二六・一中）。

(91) 円珍『法華論記』（『日仏全』二五・三下）。

之れを都とす。六大城の中の極なれば、以て勝と為す。故に「勝余一切城舎」と言う^乃次に「耆闍崛勝」とは、次に所統を顕す。五山の中に於て、此の山独ち勝れたり。故に勝余と言う。一切の諸仏皆な此の山に住す。是れは能住に従いて勝れたりとす。三世の正覚、恒に其の中に於て『法華経』を説く。是れは法門に従いて勝れたりと為す^{上巳}と。

又た嘉祥大師の『宝窟』に曰く、^四

『法華論』に云く、城山最勝なるは経の勝るることを表す。『十地論』に言く、此の法勝るるが故に、初時及び勝処に在りて説くと。此の二論に依るに、即ち化主時処を以て説経序に属す。『智度論』に依らば、時方人を説きて信を生ぜしむるが故に、伝経序に属す^{上巳}と。

此れ等は皆、説処の優劣に由りて教法に高卑有ることを判ず。今も亦、然るべし。学者省察せよ。

問て曰く、夫れ一乗三乗の天馬は靈鷲山の阿^{くま}に濟^{せい}たり三車四車の転輪は給孤園の砌に轟轟たり。夫れ若し一処に於て他経を説

かば、全く一勝一劣の義を成すべからず、如何。亦た如来、八国陛下の致請に赴き善逝、勝鬘夫人の宮室に入り玉いし等、是れ豈に天子皇后のみを益するに非ずや。若し爾らば、所立更に成立せざる者か。

答て曰く、此の難、更に小子には関らず。応^{まさ}当に先ず世親論主を沮^はみ、次に金陵智証を誘^{おそ}るべし。若し難破襲い來ること有らば、三聖定んで通会有らん。且く其の時小子、夫の三賢の義趣に与^{くみ}して、以て君が邪難を撥却せん。

問て曰く、説処の優劣に由りて、教行の浅深を成ずること甚だ以て不明なり。夫れ天上は是れ勝妙の依処、人中は乃ち卑劣の器界なり。然に方等大集の妙文は欲色界の間に於て之れを説き、寂照如来の内証は第四禪の中に在りて之れを宣べ玉えり。最初頓説の華嚴は是れ欲天上四の説、二十九年の般若は迺ち第六他化の説なり。若し爾らば当に法界唯心の玄旨、尽淨虚融の空理等を以て衆典の最頂と為すべし。

答て曰く、此の難非なり。夫れ諸仏利生の本意は其れ志唯^{ただただ}一人

(93) 「話する」とあるが、「誘る」の誤りと判断して改めた。

間に在りて余には非ず。所以に三世成道の金座は摩竭提国に在り。衆聖大般の宝床は双樹林下のみに立つ。八相已に人趣に局る。本懷豈に余道に亘らんや。今説処の上下に由りて、教法に高卑有るの義を存することは、是れ則ち人間の処処に於て、以て此の義を成立するのみ。学者迷いを致すこと勿れ。

問て曰く、何意有てか、人中を以て正機と為す。余趣を以て傍徒と為るや。

答て曰く、此れに二義有り。一には天上は妄樂多きが故に厭離の心を生ずること難し、厭離の心生ぜざるが故に、解脱を求むる心無し。解脱を求むるの心無き故に、生死に墮在す。生死に墮在するが故に解脱の心無し。解脱の心無きが故に厭離の心無し。厭離の心無きが故に妄樂に貪著す。故に三世の法王、十方の法主、皆同じく上二天上に出世し玉わざるなり。二には、曰く人間の衆生は報得通無きが故に、天堂に上ること惟れ難く、海岳に到ること亦た難し。余趣の群類は生得通有るが故に、人中に來臨すること甚だ易し。如來六趣の一切をして同時に之れを化益せしめんと

欲するが故に、人中に出現して余界には出世し玉わざるなり。

問て曰く、若し爾らば、焉んぞ論藏の中に上二下三を非して欲の人天を以て如来出現の処と為すと云うや。

答て曰く、此の難非なり。是れは成道の処を指すには非ず。只だ是れ適時撰化の処を顯すのみ。

問て曰く、『般若』等の大部衆典、或は耆山に於て之れを説き、或は逝林に在りて之れを宣べ玉えり。若し爾らば、今の所立如何。

答て曰く、他経は或は一、或は二にして未だ必ずしも三を具せず。今典は具に三箇の勝場に在りて之れを説けり。二一と具三と其の優劣、学者知りぬべし。抑吾門の經典の三処周備せることは、宛も同席にして琴詩酒を戯ぶが如く、亦た一時に雪月華を翫うに似たり。他経の一二を具うるや。譬ば泊瀨山には華のみ有り、姨弃山には月のみ有るが如くに相似り仏家の好士、其の賞不、奈何ん。

問て曰く、他経は一部に一二を具し、今経は一処に一会有り。二と一と其の義如何ん。

答て曰く、夫れ三会の三部は吾門の正依なり。若し爾らば只ただ是れ自家の光華のみ、已上。説処の勝劣に由りて教行に高卑有ることを明し訖んぬ。

次に説時と言うは、夫れ再生敗種は是れ如来の心腑、頭本遠寿は乃ち調御の咽喉なり。且く爰に法王、運啓ひらけ嘉会時至て出世八九の載、初めて広略に開三し法譬をもつて、闡揚し玉う。然に王舎の逆事を憫あわれんで忽に実相本懷の梵筵を抛て、速に大悲出世の本懷を遂げ、鷲嶺従り没して鳳闕に於て出で玉う。斯れは是れ牟尼薄伽、三学式内の教行を捨て、六字尊号の別業を取らしめんと欲し玉うの謂なり。

原るに夫れ三十年後、八教已に竟ぬれば全く余乗の法輪を転ずべからずと雖も、如来七十三の祀、西方の説時已に至るが故に、第一の法華を聞きて、無上の摩尼を取り玉えり。二道の高卑其れ如何ん。本懷の上の本懷。是れ一層級なり。利物の上の利物、乃ち一鞭進なるのみ。何が故ぞ一層一鞭なるや。是れ則ち難易勝劣の不同、自他二撰の殊異あればなり。嗚呼痛ましいかな。設い不

死国の人と雖も、豈に絶氣の日無からんや。設い無脛国の人の如く、再び蘇活すと雖も、要ず須く永滅の期有るべし。設い鬼を吞みて飯と為すと雖も、阿防獄卒は甚だ餐み難く、設い千甘を嘗めて樂を生ずと雖も、鉄丸洋銅は尤も飲みがたし。於あ、五住の係蹄、脚在り。闔なんぞ其の足を絶ちて称揚せざらんや。三妄の蝮蛇、手に在り。盍なんぞ厥その節を断ちて持念せんや。若し二念の行儀を専らにせば、印滅し文成ぜんこと今きょうに在り、明あすに在り。南無阿弥陀仏。